

地域貢献を通して、「思い」を「行動」へと移すことができる生徒の育成 —キャリア教育との連携—

愛知県立知立高等学校教諭 小嶋 正人

1 はじめに

本研究に向けて事前に行ったセンターによる実態調査の結果から、本校生徒の特徴として、次の2点が挙げられた。

1点目は、小中学生と比べ「今住んでいる地域の行事に参加している」と答えた生徒の割合が低いことである。本校は名鉄知立駅から徒歩圏内に位置しているという交通の便の良さもあり、知立市外から通っている生徒が現在7割以上いる。それに加えて勉強や部活動などの日々の忙しさから、自分が住んでいる地域や知立市に対する生徒の意識は低くなっていると思われる。

2点目は、「～を大切にしている」（意識）と「～をしている」（行動）の差が大きいことである。一般的に高校生は精神的な面において子どもから大人へと大きく成長し、家族や周囲の人々に対し、さまざまな事柄に関して自ら考え、豊かな感情を抱くようになってくる。その一方で、「恥ずかしい」「かっこわるい」という意識も強くなり、素直な思いを行動に移すことがなかなかできなくなる時期でもある。

しかし、「意識」することを繰り返すことで、無意識のうちに「思い」が形成され、自然な形で「行動」に移せるようになっていくと考える。

まずは生徒に地域への気持ちや自分の気持ちを「意識」させて「行動」に移させることから始めたい。そしてその「意識」が「思い」となり、「行動」に移すことができる生徒を育成したいと考える。

2 手だて

- (1) 地域との連携を図るような活動を取り入れる。
- (2) 活動のねらいや自分の考えを文章化し、整理させる。

3 実践の内容

- (1) 地域との連携を図るような活動を取り入れる。

本校では平成24年度から平成26年度までの3年間、文部科学省から研究開発学校としての指定を受け、学校設定教科「キャリアデザイン」を創設し、普通科における体系的なキャリア教育について研究に取り組んだ。ここでは平成26年度の取組について報告する。

キャリアデザインの授業の中に「地域の産業・文化」という単元が設定されている。この単元は、生徒の訪問先希望調査を基にクラスの枠を超えて、新たなグループを編成し、学校近辺にある産業・文化施設を訪問するとともに、職員の方から話を聞くものである。訪問先からも要望を聞き、訪問先によってはイベントへの参加や協力などの依頼をされることもある。本単元では地域や、地域と自分との関わりの理解の深化、職業観や勤労観の育成などを目的としている。本単元を通して、生徒は次のように地域との交流を図った。

ア 全体ガイダンスと訪問施設希望調査

単元の目的や、日程を含めた全体の流れを説明し、訪問施設希望調査を実施した。訪問施設はA班：地元商店街、B班：知立市歴史民俗資料館と知立市図書館、C班：パティオ池鯉鮒、D班：上重原保育園、E班：猿渡小学校、F班：ギャラリエアピタ知立、G班：ホテルクラウンパレス知立の7箇所である。

イ 各班による事前準備

平成24年度より毎年訪問しており、今回参加生徒の多かったC班：パティオ池鯉鮒とE班：猿渡小学校について説明をする。

(ア) C班：パティオ池鯉鮒

12月21日に行われるイベント「パティオDEクリスマス」に向けての準備として①チラシの制作、②工作物の考案、③飾り付けの考案を依頼された。「10代、20代のような若い世代の人達が興味をもち、参加したくなるイベントにしたい。そこで、高校生力を貸してほしい。現在のパティオの職員にはない、高校生ならではの発想や提案をしてほしいので、『これはダメ』ということは考えず、自由にアイデアを出してほしい。」ということだった。また、フロント業務を体験させてもらえることにもなった。そのため、生徒を四つのグループに分け、イベント準備の3グループはそれぞれ話し合いをして意見を出し合い、フロント業務体験のグループは、施設からもらった10ページに及ぶフロントマニュアルを読むことで事前準備を行った。



<パティオ打ち合わせ>

(イ) E班：猿渡小学校

事前打ち合わせにおいて、小学校側から「学校の仕事を知るためには、実際に子どもと触れ合ってもらうのが一番よい。小学1年生の授業を1時間、高校生にみてもらい、一緒に遊んでもらいたい。遊びの内容は高校生に任せるが、小学生に少し考えさせるような遊びにしてほしい。」という要望があった。これを受けて、生徒を少人数のグループに分け、グループごとに遊びの内容を考えさせた。また、その遊びを小学生にどのように説明するのか、遊びに必要な道具をどう準備するのか、場所はどこののか、なども生徒に考えさせた。



<猿渡小学校打ち合わせ>

ウ 産業・文化施設を訪問

C班：パティオ池鯉鮒とE班：猿渡小学校について説明をする。

(ア) C班：パティオ池鯉鮒

まず会館内を見学させてもらい、会館からの概要説明の後、4班に分かれて体験活動、そしてまとめ報告の順で行った。

会館内の見学では、一般的な施設見学に加えて、従業員しか通ることのできないルートや、荷物の搬入に使うルートなど、一般利用者には危険で立ち入れない場所も安全に配慮をして案内してもらい、その後大ホールの舞台に立たせてもらった。生



<施設見学>

徒は普段見ることのできない場所をたくさん見ることができ、安全面での配慮や施設の構造上の工夫など、さまざまなことを学ぶことができた。会館からの概要説明では、施設運営の基本方針、組織図、現在抱えている課題、取り扱っている事業の概要、情報発信活動などの説明を受けた。質疑応答の時間では、「パティオ」という名前の由来、施設の歴史、主な利用内容、利用人数、従業員の仕事内容、主なイベントなど、生徒が事前に考えてきたさまざまな質問に答えてもらった。体験活動では、イベント「パティオDEクリスマス」の①チラシの制作、②工作物の制作、③飾り付け、及び④フロント業務体験を行った。イベントに向けてのチラシや工作物の制作・飾り付けでは、もともとパティオが考えた案に生徒の考えた案を加えて、今までにはなかった新しい物を作り出した。生徒は、自分達が考えた案が実現し、世の中に出ていくことに興奮しながら、職員の指導の下でそれぞれ制作に取り組んだ。その一方で、安全面や予算面などの理由で、せっかく考えた案でも実現できないものがあり、現実の厳しさも学ぶことができた。フロント業務体験をした生徒は、事前に手渡されたフロントマニュアルの内容を確認することから始まった。内容が多岐にわたり、細かな指示がたくさんあるため、事前に読んでおいたにもかかわらず、体験で上手に対応できる生徒は一人もいなかった。フロントという仕事を実際に体験してその難しさを痛感するとともに、仕事の陰に隠れた細かな気配りにも気付くことができた。

最後のまとめ報告では、グループごとに体験の内容や学んだこと、反省点などを全体に報告した。各グループで得たものを全体で共有することで、パティオという施設やその仕事について理解を深めることができた。

(イ) E班：猿渡小学校

給食や掃除の時間を見学した後、六つのグループに分かれて小学生と交流した。初めは緊張していた生徒も、小学生の無邪気さに助けられ、次第に打ち解けることができた。それぞれの活動場所では、生徒が遊びの内容を分かりやすく説明し、各グループが考えた遊びを小学生とともに楽しんでいた。遊びの最中は小学生も生徒も笑顔が絶えず、小学生が生徒に抱きつく場面も多く見られるなど、よい雰囲気の中で取り組むことができた。また、小学生の反応を見ながら遊びのルールを柔軟に変更したり、活動内容を変更したりするなど、状況を見ながら臨機応変に対応することができていた。小学生が怪我をしないように、安全面での注意を払う姿も見られた。

その後、生徒は小学校の校長先生から話を聞いたり、質問したりした。質問の時間では、教師という仕事のやりがいや苦労、教師になろうと思ったきっかけなどを教えていただいた。



<イベント打ち合わせ>



<フロント業務体験>



<遊びの説明をする高校生>



<小学生との交流>

(2) 活動のねらいや自分の考えを文章化し、整理させる。

ア 訪問の振り返り

ほとんどの生徒が高い自己評価をした。感想には「地域をよくしようと活動のできる仕事場だと思った」(パティオ)、「地域を盛り上げるためにいろいろな人が関わってくれていて、知立市民として嬉しかった」(地元商店街)、「宿泊以外にも力を入れていて、できる限り地元の人にも来てもらえるように頑張っていた」(ホテル)など、各施設が地域に貢献していることを知り、地域に興味を持つことができたという生徒が多かった。「自分からすすんで挨拶や質問をすることができた」(地元商店街)、「一般のお客さんにも自分から挨拶をした」(パティオ)「疑問に思ったことを質問して解決できた」(アピタ)など、自ら積極的に行動することができたという感想も多くあった。また、「どの仕事も大変なことはあるけど乗り越えていく」(パティオ)、「どんなことに対しても、心から楽しむようにしようと思った」(小学校)、「挨拶や小さな会話で信頼関係が築ける」(保育園)、「最初からやりたいことをするのはなく、そこで仕事のやりがいや魅力を見つけるのもいい」(図書館)、「将来自分もやりがいをもてる職場で働きたい」(アピタ)など、職業観や勤労観に関する記述も目立った。

イ 発表準備・成果発表会

単元の最後に、普通科4クラスで成果発表会を行った。できるだけ多くの生徒が全体の前で発表できるように、各班の発表内容を細かく分けて発表させた。また発表会の会場準備や司会進行役も生徒から募集し、できるだけ生徒主体で発表会が運営されるようにした。

各班がこの訪問において知ったことや学んだことを全員で共有することで、地域の理解をより深めることが職業観や勤労観の育成にもつながった。



＜成果発表会＞

ウ 訪問前後のアンケート

表1は、単元の初めと終わりに、生徒の地域への思いや人との関わり方についての意識調査を行い、事前、事後の比較をしたものである。これによって生徒の意識の変化を分析した。

【表1 アンケート集計結果】

「よく当てはまる」と「どちらかといえば当てはまる」を合わせた当てはまるを選んだ割合(%)

項目名	事前	事後	変化量
1 わたしは、人の役に立っている	48.7	60.6	11.9
2 人に会ったらあいさつをしている	79.8	85.2	5.4
3 日頃お世話になっている人々に感謝の気持ちを伝えている	63.3	73.5	10.2
4 自分の役割や仕事を、責任を持って果たしている	77.8	88.4	10.6
5 今住んでいる地域や通っている地域に貢献している	37.9	36.1	-1.8
6 人の気持ちが分かる人間になりたい	90.5	94.8	4.3
7 お世話になった人々に感謝をすることは大切である	95.0	96.8	1.8
8 人に会ったときにあいさつをすることは大切である	93.0	94.9	1.9
9 自分の役割や仕事を、責任をもって果たすことは大切である	93.1	96.1	3.0
10 今住んでいる地域や通っている地域に貢献することは大切である	85.5	86.4	0.9

(ア) 事前アンケート

アンケートの項目「3 日頃お世話になっている人々に感謝の気持ちを伝えている」「7 お世話になった人々に感謝をすることは大切である」「5 今住んでいる地域や通っている地域に貢献している」「10 今住んでいる地域や通っている地域に貢献をすることは大切である」に着目をした。項目3と項目7、項目5と項目10は、それぞれ聞いている内容がほぼ同じで、「意識しているか」と「行動し

ているか」の違いがわかるようになっている。「よく当てはまる」と「どちらかといえば当てはまる」を合わせた当てはまるを選んだ割合の差は、項目3と項目7で31.7%、項目5と項目10で47.6%あり、意識はしているが行動に移せない、という現状がはっきりと数字に現れた。

また項目10において「よく当てはまる」と「どちらかといえば当てはまる」を合わせた当てはまるを選んだ割合は90%を下回っており、地域貢献に対する意識の低さも浮かび上がった。

記述によるアンケートでは、訪問に対する心構えとして「感謝の気持ちを常に意識する」「少しでも知立に貢献しようという気持ちを持つ」「迷惑をかけないようにする」というような意見が多かった。一方、「お礼の言葉を忘れずに」「来てもらってよかったと思ってもらえるような行動をする」というように「行動」に関する意見も少数ながらあった。

記述によるアンケートでは、施設の方々の気持ちを考えた上で、どのような気持ちで施設を訪問すべきかを考えさせた。「相手に迷惑をかけないようにしたい」「感謝の気持ちを持って訪問すべき」「挨拶をしっかりしたい」という記述が多かった。

(イ) 事後アンケート

事後アンケートでは、生徒の意識と行動のギャップについて変化が見られた。行動に関する項目3と、意識に関する項目7の割合の差が、事前アンケートでは31.7%であったが、事後アンケートでは23.3%へと縮まった。これは、訪問を通して、感謝の気持ちを伝えることの大切さや、伝えられたときのうれしさがわかったのだと思われる。

また、事前アンケートと比較して割合が10%以上変化した項目は「1 わたしは、人の役に立っている」「3 日頃お世話になっている人々に感謝の気持ちを伝えている」「4 自分の役割や仕事を、責任を持って果たしている」の三つであった。項目1や項目3は、訪問先の人から褒められたり感謝の言葉を直接伝えられたりしたことや、自分から感謝の言葉を伝えられたことが、項目4は、授業の一環として授業担当者や担任などから指導された内容が、それぞれ影響していると思われる。

記述によるアンケートでは、訪問に対する振り返りにおいて「自分から進んで挨拶や質問をすることができた」「ささいなことでお礼が言えた」「一般の人にも挨拶ができた」「聞きたいことをちゃんと質問することができた」というように、事前アンケートで整理した気持ちで訪問できただけでなく、実際に行動をとることができた実感した生徒が数多くいた。

なお、地域に貢献しているかを聞く項目5だけは、事後アンケートのほうが、割合が1.8%低くなっている。記述によるアンケートの「もっと質問すればよかった」「自分からなかなか動くことができなかった」という内容からも、訪問を通して地域に貢献している自分であるかどうかを、より具体的に考え、答えるようになってきていると思われる。

また、今後については「地域の活性化にもっと貢献したい」「日々の身だしなみをしっかりしたい」「笑顔と挨拶が大事だとわかった」「自分の中で思うだけでなく、ちゃんと口にだして言葉で伝えたい」「人の気持ちを考えた上で発言や行動をしたい」「考えている暇があるなら行動するべきだと強く感じた」というような意見があり、地域貢献の気持ちが高まったり、行動することの大切さを実感したりした生徒が多かったように思えた。

4 実践のまとめ

今回の訪問を通して、生徒は地域の産業や施設をより詳しく知り、地域の理解や貢献へとつなげることができた。また、そこで働く人達の話聞くことは生徒の職業観や勤労観の育成を促し、それが普段の学校や家庭での生活態度の改善、日常に対する感謝の気持ち、あたりまえの事に対する意識の

変化などをもたらした。教員も、ふだんの学校生活では見られない生徒の姿を見ることができ、生徒理解や信頼関係を深めた。地域の人々も、若い世代に地域のことを知ってもらうだけでなく、今の高校生が考えていることを知ったり、高校生のアイデアや力を借りたりすることができ、地域の活性化へとつなげることができた。

また、今回は生徒に「意識」を「行動」へ移すことを重要視させた。アンケートに生徒の思いを書かせたり、教員が話したりして繰り返すことで、しっかりと意識付けができたので、多くの生徒が感謝の気持ちを言葉や行動で表すことができた。このことは、振り返りのコメントや、アンケートの結果にもよく表れている。ある施設の人からは「お客さんの感謝の言葉が、一番のやりがい」ということを言ってもらい、生徒は言葉にすること、行動に移すことの大切さをより実感できたのではないかと考える。

アンケートについては、訪問の前後で全 10 項目中 9 項目が改善された。小さな声かけや働きかけでも、生徒に対する影響は大きく、すぐ結果に反映されることがわかったので、今後の指導に役立てたい。

5 おわりに

今回の訪問や学校行事などのイベントにおいては、生徒の意識も高く、また生徒への影響も大きい。しかし、イベント後に生徒が元に戻ってしまえば意味がない。このようなイベントを単発で終わらせずに適切なタイミングで実施し、継続していくことや、ふだんの生活の中でも生徒への声かけや働きかけをしていくことで意識を維持することが大切である。

高等学校は小学校や中学校と違い、さまざまな地域から生徒が通うので、生徒は学校が立地する地域に対する意識が低いように思われる。しかし、高等学校においても地域を上手に活用し、生徒を地域に関わらせることで、地域に守られ、地域に育てられていることを実感できる生徒は多いと思う。そこに感謝の気持ちを抱き、言葉や行動に表すことを大事にしてほしい。

今回の体験活動で地域を知り、「意識」を「行動」へ移せた生徒が多くいたことは本当にうれしい。今後もこの「意識」が「思い」へと変わり、「行動」し続けられるような生徒を育てることができるよう、学校と地域との連携を密にしながら、生徒を主体としたさまざまな体験活動を感動とともに経験させたい。